

テーマ

第二看護学科学生の子どもに対する認識の変化に関する研究

—子どもに対する認識の変化と授業設計・教材との関連—

静岡県立大学短期大学部

看護学科小児看護学

金城やす子 小島洋子 片川智子

I はじめに

社会の変化に伴う核家族化により子どもの数が減少し、子どもとの接触体験が極度に少なくなってきた。当短大に入学してくる学生、第二看護学科学生においても子どもとの接触体験が少なく、そのことが子どもの認識に大きく影響していると思われる。講義でも子どものイメージがつかめないために成長発達や小児の特性についての理解が知識的・観念的になりやすい傾向にある。石原らが第二看護学科学生においても「子どもとの接触体験は年ごとに減少している、子どもに対する認識は浅いレベルにとどまっている。」¹⁾と指摘しているように、准看護師教育で小児看護学および小児看護実習が行われているにも関わらず、子どもとの接触体験の減少が見られる。子どもの認識が不十分なことが「小児は難しい、面倒、どうやって接していいのかわからない・・・」などの発言が生じたり、小児看護実習で子どもとの関係性が維持できないなどの状況を生みだしているのではないかと考えられる。また学生を理解を深めるための教材としては、講義と組み合わせたビデオやスライドなどの使用、演習の取入れなどの工夫をしているが、学生に十分な理解を得るまでにはいたっていないのではないかと考える。

そこで、第二看護学科学生が子どもにどのような認識を持っているのかを調査し、講義・演習・実習が学生の子どもへの認識にどのように影響し変化を生じているのかを明らかにしたいと考えた。また、学生が小児看護に対しイメージしやすい授業の工夫、教材の工夫を考えることにより、小児看護の理解をより深めることにもつながるのではないかと考える。そこで今回は学生のもつ子どもに対する認識を調査し、看護基礎教育過程の2年間に、学生の認識がどのような変化を生じているのかを明らかにする。

イメージとは、主体的な体験や認識を言語表現したものととらえた。

(今回、子どものイメージを調査し、学生が子どもに対して持つ思いや思考を言語表現しラベルに記入したものをデータとして使用した。)

II 研究方法

1) 研究期間

平成14年4月～平成16年3月

2) 調査期間

① 平成14年4月、平成15年1月、平成15年10月～12月

② 授業と調査期間の関連

第1回調査：入学時調査、平成14年4月講義開始時に実施（1回目）

講義：『小児看護概論』平成14年4月～7月実施

講義：『小児の成長発達と生活』平成14年10月～平成15年1月

第2回調査：平成15年1月講義科目終了後に実施（2回目）

講義・演習『小児期の健康障害と看護』平成15年4月～9月

臨地実習・小児看護：平成15年10月～12月

第3回調査：講義・演習『小児期の健康障害と看護』、臨地実習：小児看護終了後（3回目）

平成15年10月～12月に実施

2) 研究対象

平成14年度入学の第二看護学科学生40名（第3回調査時は38名）

3) 学生への説明と倫理的な配慮

学生には講義開始時に研究の目的、方法を説明した。さらに、1回目・2回目調査時には再度口頭で研究目的を説明し、3回目には文書を使用し、個々の学生に説明、協力を依頼した。

カード記入の仕方については、具体的な記入方法を書いた用紙を用いて説明した。また、記入および提出の有無については任意とし、評価には一切関係しないこと、個人が特定できないような配慮をすること、提出後のカードを学生が取り戻すことも可能であることなどを説明した。

4) 研究方法

① カードは3枚配布し、乳幼児期にある子どもをイメージして1枚に30字以内で「子どもとは」について、学生がどのように認識しているのかを記入してもらった。

1回の調査時に、それぞれの学生にカード3枚を作成してもらった。

② 学生が記入したカードを研究者で読み合わせ、一枚に何種類かの違う内容が書いてある場合には研究者が他のラベルに記入し直す作業をし、一つの意味単位の文章（表現により単語、句、文章）としてデータ化した。

③ データ化されたカードの類似のものを研究者間で継続比較し、カテゴリー化した。

④ さらにカードの表現を以下の3種類に分類し、各3回のカード内容の変化を比較した。（レベルという表現を用いる）

A：感覚・感性レベルの表現（単語、感嘆詞的な表現）

B：思考・概念化レベルの表現

C：看護の概念（小児看護の特性を含める）としての表現レベル

III 結果

1) カードの回収

カードの記入文字数：一枚のカードに記入する文字数は30字程度と説明したが、学生が記入した文字数の最小は2文字～最大80文字であった。

表1 カード回収率

回数	配布人数	配布枚数	回収した枚数	回収率	修正したカード数
1	40人	120枚	78枚	65%	187枚
2	40人	120枚	76枚	63%	98枚
3	38名	114枚	78枚	88%	121枚

2) カテゴリー化

カードを内容別に分類し、さらに4)の研究方法で述べたレベル：A、B、Cに分類表示した。

表2 カテゴリー別カード数

カテゴリー	調査回数 サブカテゴリー	入学時				講義課目終了時				演習科目・実習終了時			
		A	B	C	計	A	B	C	計	A	B	C	計
(1) 未熟であり、一人では何もできない存在	身体的・精神的・機能的に未熟	7			7	2			2			1	1
	一人では何もできない	6	3	1	10		3		3		1		1
(2) 素直な存在	かわいい	8			8	1			1	4	1		5
	素直	6			6	3			3	4	5	1	10
	無邪気	6			6	1			1				
	純粹	5			5	4			4	1	1		2
	話す・寝る・遊ぶ・食べる・元気	11			11	1			1		2		2
	泣く、笑う、体で表現する	5	9	1	15	1			1	5	5	4	14
(3) 弱い存在	小さい	6			6	1			1				
	年齢が低い	2			2								
	弱い	3			3								
	精神的ダメージを受けやすい	4			4								
	自己責任能力が弱い		2		2								
	弱く見えるけど強い部分がある		2		2								
(4) 守りや保護が必要な存在	親の愛情が必要	4			4	1	4		5	3	3		6
	守る	5	3	1	9	2	1	1	4		2	1	3
	世話が必要	6			6		1		1		2	1	3
	支えが必要	3			3	1	1		2		1	2	3
(5) 大人の言動・行動に反応する存在	大人をよくみている	3			3		3		3		3	2	5
	敏感に反応する		4		4		1		1		3	1	4
	感受性が高い	2	1		3								
	人の言動を素直に信じ込む			2	2						2		2

	大人を信頼している		1		1	1			1				
(5)環境の影響を受けやすい存在	環境が性格を形成する			2	2	1	2	1	4	1	3	5	9
(6)成長段階にある存在	成長過程にある	6		1	7	14	8		22	5	3	2	10
	成長が著しい	2			2	8	1		9	1	1		2
	吸収していく時期		2		2		3	1	4		2		2
	治療中も成長発達への援助が必要											1	1
(7)興味、知識欲が旺盛な存在	知りたがる	1	2		3								
	いろいろな物に興味を持つ	5			5								
	何でも吸収する	1	1		2	1	6		7		5	2	7
	発想が豊か			3	3	2	4		6		1		1
(8)可能性を持った存在	個性を持った一人の人間		5	1	6	1	1	2	4		8	7	15
	一つのことを大切にする	1	2		3						2		2
	可能性を持っている		1	1	2	1	3		4		1	1	2
	かけがえのない存在	1	3		4							1	1
	希望に満ちている		1		1	1	1		2	1			1
	幸せと楽しみを与えてくれる	1	1		2		1		1		1		1
	自由にのびのび生活する										2		2
(9)自己中心的な存在	外見と内面は違う		2		2						1		1
	本能のほうが強いの	1	1		2								
	何をするかわからない	4	4		8						1		1
	わがまま	3			3								
	自己中心的	3	1		4		1		1				
(10)社会に出たことがない存在	社会に出たことがない	1			1								
(11)不思議な存在	不思議な存在	1			1						1		1
(12)痛みに強い存在	痛みをじっと我慢する									1			1
	計	123	51	13	187	48	45	5	98	26	63	32	121

各カテゴリーに記入した枚数を以下のグラフに示した。

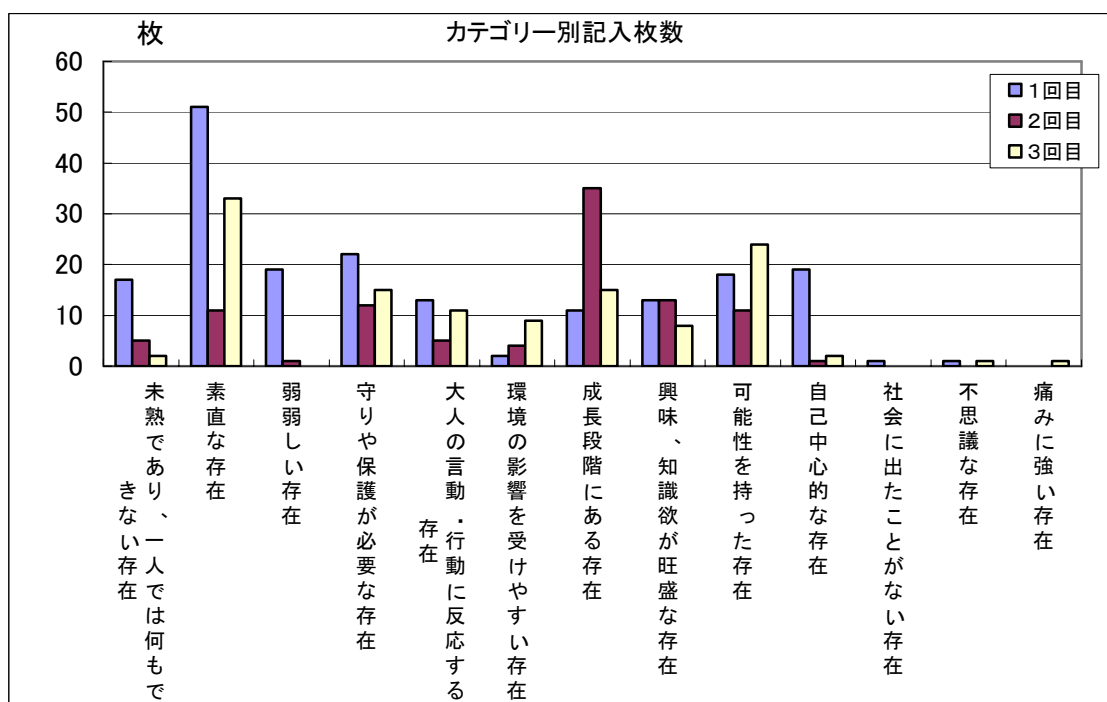


図1 カテゴリ別記入枚数

IV 考察

子どもに対する認識の変化を経時的、内容的に分類評価した。その結果、12カテゴリ、47サブカテゴリに分類することができた。各カテゴリについて調査時と講義・実習との関連、内容の変化について項目ごとに考察する。(文章中の表示は『』:カテゴリを表示、《》:サブカテゴリ、〈〉:カードに記入された元のデータを表示している。)

(1) 未熟であり一人では何もできない存在

第二看護学科学生は、准看護師教育において小児看護学を履修し、日数・方法などの違いはあるが臨地実習も行っている。しかし、子どもに対する認識は『未熟であり、一人では何もできない存在である』という見方が入学時のカードに17枚、9%見られている。石原らの文献からも「第二看護学科学生は小児看護の実習経験はあるが子どもの認識は知識的・観念的なものが多く、子どもの具体的なイメージは描きにくくなっている。」²⁾と指摘しているように、〈自分では何もできない、自立していない〉と、子どもが自立をしていく段階にあるということが十分に認識されていないのではないかと考えられる。しかし、小児看護学の講義の中で子どもや小児看護の対象としての子どもについて考えることで2回目、3回目のカードでは未熟性だけを取り上げたものは減少し、〈すべてにおいて未発達な面があるため手を差し伸べる必要がある〉など、看護的な視点をふまえた記入がされている。講義での理解を臨地実習において体験し、経験していく過程が子どもの認識を大きく変化させていると思われる。

(2) 素直な存在

〈かわいい、素直、無邪気〉など、子どもをAレベル:感覚的にとらえた表現が1回目、

2回目に多く見られている。学生自身も子どもをみたまま、感じたままに素直に表現しているが、演習・実習終了後には、〈スタッフや学生の前では笑っているが、母親の前では本当の自分に戻り気持ちを伝える〉と、素直な表現の中にも子ども自身が関係性を意識し対応していることが記入されている。また〈泣く、笑う〉など体で表現する子どもを〈言語では自分の気持ちや状態を伝えていなくても顔の表情や泣くことによって非言語的に周りの人に伝えている〉と子どもの表現方法を理解している。『素直な存在』は1回目では27%、2回目11%、3回目27%と多くの学生が記入しており、子どもに対する一般的な認識、表現とも受け取れる。

(3) 弱弱しい

《小さい、弱い、自己責任能力がない》など、(1)の何もできない存在と同様、子どもを否定的に見る見方は入学時に多く記入されている。子どもは弱い存在であるという認識は1回目のみであり、2回目にわずか1枚の記入という点からも、講義や実習により子どもが弱だけの存在であることが否定され、子どもに対する認識が大きく変化していることがわかる。このカテゴリーにおいては記入されている内容ほとんどがAレベルの内容であり、《弱く見えるけど強い部分もある》というカードのみ、子どもがただ弱い存在だけではないことを多少認識していると考えられる。

弱いという表現を、疾病に対する感受性の問題、病気になりやすいこと、また病態が変化しやすいことを含めて認識できると小児看護の特性の理解につながるのではないかと思う。しかし、今回の調査では弱い存在と疾病との関連について記入しているものは見られなかった。

(4) 守りや保護が必要な存在、環境の影響を受けやすい存在

子どもにとって両親、特に母親の存在の必要性は多くの学生が認識している。小児看護が母子を含めて看護の対象と見ていることから、この項目の記入が多く、また、看護の視点を踏まえた記入につながっていると考えられる。〈親に守られ愛されてこそスクスク成長していく〉というように、親との関係において子どもの成長発達を見ている学生もあり、成長発達支援に親の存在を必要とすることが理解されている。〈親の愛が必要、守ってあげなければならない〉などという保護する対象と見ている見方から、〈守り、より良い環境に整えることが必要〉と人的環境も含めた環境の整備を意識している学生もあり、“弱い・自立できないから守る”という認識だけではなく、より良い成長発達を促すことが親や大人のかかわりに影響するものであり、そのために環境を整えることの大切さにつながっていると考えられる。また、環境によって子どもの発達、特に精神的な発達への影響の大きさを記入している学生も多く、〈あらゆるものが児の心理状態に影響する〉また〈誰からも愛され、愛される度合いによって変化する存在〉と位置付けている。単に物理的な環境を意識しているだけではなく、親や大人などの人的環境の大切さも理解している。

(5) 大人の言動や行動に反応する存在

〈親や大人の目を気にしている〉〈大人のことをよく見ている〉と認識している学生は、子どもに対する認識だけではなく、常に見られている自分を意識していることも考えられ

る。また幼児期の体験から、親の言動を常に意識していた自分がいた可能性もあり、〈成長するにつれ人の目を気にする〉と思春期の心理状態を反映していると思われる学生もみられた。このカテゴリーでは回数による変化はあまりみられなかった。しかし、3日目の内容の変化では〈人間性を見て判断し、対人関係を築いている〉〈その子の発達段階なりに現状を受け止めようとする〉と実習終了後に受け持ちの子どもとの関係を通して学んだ内容を評価し記入しているものが多かった。対象の子どもをよく見てケアを行うという実習から、子どもとの関係性の難しさや子どもによる評価を受けながらの実習が、子どもの見方を変化させたことを学生自身気づかされているようである。

（6）成長段階にある存在

子どもが成長発達していくことは、准看護師教育においても説明され、学生は十分に認識できていると思われる。短大での小児看護では、対象としての子どもの理解を深めるために、子どもは常に成長発達している、成長発達にはある一定の法則はあるが個別性やわずかな年月齢による差が発達上の大きな変化をもたらすこともある、ということを講義で説明している。そのためか成長発達に関して多くの学生が記入している。1回目の記入では〈成長している〉〈成長が著しい〉という表現に終わっている学生が多い。しかし、成長発達の講義が終了した2回目では〈周りの環境に影響を受けながら成長していく〉〈未熟でありながらも成長の過程を一つ一つ歩んでいる〉などの表現に変化してきている。しかし、講義課目だけでは子どもの発達を理解するのは難しくイメージするまでにはいかないのか、「理論上の発達は理解できるが実際の子どもの行動と結びつかない。」という授業評価が聞かれる。ビデオをはじめとする視聴覚教材を利用しているが、講義内容と教材を有効的に活用することは難しく、講義での理解を臨地実習で補足しようとするのが現状でもある。実習後の3回目では〈身体的・精神的・運動機能が相互に関連しながら成長発達し続けていく〉などの表現に変化し、単に成長発達している、という表現ではなく、成長発達には環境の影響や両親・大人のかかわりの必要性、さらに健康障害を持つ子どももその子なりの成長のペースがあること、成長の時期による変化があることなども認識できるようになっている。また成長の過程は多くのことを吸収する時期であり、日常生活の自然な体験が子どもの成長発達の力になっていることも学習している。学生は臨地実習、特に保育園実習において年月齢のわずかな違いによる言葉や行動の違いを経験し、両親や保育士のかかわりの中で子どもたちなりの成長をしていることを学んでいる。

（7）興味、知識欲が旺盛な存在

学生は子どもがさまざまなものに興味を持ち、何にでも興味を持つ存在であることは認識している。1回目では《知りたがる》《いろいろなものに興味を持つ》という認識が多く見られたが、2回目3回目には《何でも吸収する》《発想が豊か》という認識に変化している。日常生活の中から自然に学び取る力を持っていることや遊びを通して社会性や知識を吸収していくことができるという認識の変化は、臨地実習での子どものかかわりの経験が大きく影響していると考えられる。「子どもの興味についていくのが大変だった。子どもの行動力は想像をはるかに超えていた。」という、実習の反省にもあるように、学生は子どものもつ計り知れない知識欲、発想に子どもの見方が大きく変化したと思われる。

(8) 可能性をもった存在

小児看護では、子ども観の変遷において、時代が子どもの見方を変化させてきた経緯を説明し、親にとって子宝といわれた時代から国の宝といわれた時代を経て、人権を持った一人の人間としての子どもの存在を説明している。1回目の調査でも個人としての子どもや希望に満ちている子どもを認識している学生もいたが、講義・演習・実習と経験していくうちに〈病気があってもなくても子どもに変わらない〉〈同じ年齢でもできる子もいればできない子もいる、個人差がある〉と、個人を尊重した見方をするようになっていく。子どもの持つ権利や社会により守られている子どもの権利について理解し、子どもの認識を深めているように思われる。講義だけでは子どもの持つ権利や可能性までを理解し、関わることは難しいが実習を通して理解につながっているように思う。

子どもが無限の可能性を持つ存在であること、そして子どもの持つ可能性や自由にのびのび生活する姿は両親や大人に幸せや楽しさを与えてくれる存在となっている。〈元気をくれたり、見ているだけで癒される存在の子ども〉という認識は、実習で看護する立場の学生が子どもの存在によって看護された、癒されたという経験をしたのではないかと考えられる。

(9) 自己中心的な存在

子どもは〈わがまま〉で〈自己中心的〉という認識は1回目の調査に多く見られている。〈何をするかわからない〉〈見ているだけでストレス〉〈怒れる〉など否定的な感情表現が『自己中心的な存在』というカテゴリーに分類されたが、2回目3回目では〈さまざまなものに興味を持つことから目が離せない〉と〈自分だけの世界を持っていてその中に閉じこもりやすい〉など、否定的な感情という認識ではなく、小児の特性としての表現が自己中心的と解釈されたと考える。理性よりも本能にそった行動は自己中心的という見方もあるが、一方子どもらしさでもあり、素直な存在でもあり、学生の言語表現から否定的な認識とだけ考えるのは難しいかもしれない。

V まとめ

第二看護学科学生が子どもをどのように認識していたのかを経時的な変化で見えてきた。学生は准看護師教育においてすでに小児看護について学んでいるため、子どもについての認識はそれほど変化しないのではないかと考えていたが、短大2年間の教育の過程の影響が大きいことを痛感した。今回の研究で明らかになった点を以下にまとめる。

- ① 1回目の調査で『未熟であり、一人では何もできない存在』『弱弱しい存在』『自己中心的な存在』とやや否定的な表現をした学生も、講義や演習・実習を通して子どもの認識が大きく変化していた。
- ② 1回目の調査では感性・感覚レベルの表現が多かったが、2回目3回目にはより看護的な視点を持った表現方法に変化し、思考プロセスにそった表現になっていることがわかった。
- ③ 看護の視点として環境や健康、個人、そして看護の必要性などが子どもを通して表現されている。また、小児看護の特性として成長発達の視点、母子関係、子どもの持つ権利、健康障害を持つ子ども、なども表現されており、講義・演習・実習という学習

の積み重ねが学生の思考や発想を豊かにしていることが実感できた。

- ④ 個々の学生がどのような変化をしているのかについては、今回の研究では言及していない。
- ⑤ 今回の研究では、講義ごとの認識の変化や教材の使用と認識変化との関連などについては調査できていないため、研究目的の一つである教材の工夫については明確になっていない。次年度以降に教材との関連、教材の工夫について調査・研究できればと考えている。

VI おわりに

准看護師教育で子どもの看護を学んできた学生が、短大の講義や実習を通して子どもの認識がどのように変化するかを経時的に見てきた。単語や句で表現していた学生、感覚レベルで表現していた学生も2年間の学習で大きく成長することを実感した。学生自身も子どもに対し苦手意識があったが、実習を通して子どもの存在を意識し、子どもにケアされた自分を認めていた。少子化社会となり、子どもとの接触体験は徐々に減少していく傾向にあり、同時に子どもの理解ができないまま小児看護の授業が進み、理解不足、苦手意識から小児看護実習への不適應を起こさないとも限らない。講義での教材の工夫は教員に課せられた業務ではあるが、子どもとの接触経験を多くする取り組みは予算的にも、子どもの人権の問題からも思うようにいかないのが現状である。できるだけ視聴覚教材やモデルを取り入れ、学生の理解を促す努力はしているが、今回の調査からも実習に出て初めて子どもの存在を認識できることも多いという結果を得たため、2年間の学習の組み立てと教材の工夫、実習への導入の方法と実践について再度検討していきたいと考える。

引用・参考文献

- 1) 石原あや他：「看護学科学生の子どもの接触体験および認識に関する調査」大阪府立看護大学医療技術短期大学紀要 Vol8 P65-72 2002
- 2) 1)と同様
- 3) 田口玲子他：「精神科の看護師に対する看護学生のイメージと変化」新潟大学医学部保健学科看護学専攻 Vol7 P37-45 1999
- 4) 小林淳子他：「入学から基礎看護Ⅰ実習後までの病院、患者、看護婦、看護のイメージの変化」東北大学医療短期大学紀要 Vol2 P31-42 1993
- 5) 大森祐子：「小児看護実習における学生の満足感に及ぼす要因」大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要 Vol8 P73-77 2002
- 6) 奈良間他：小児看護学概論 系統看護学講座専門 21 小児看護学「1」医学書院 2003